百合子賞　佳作　受賞作品

夢を叶えたい君へ

郡山市立郡山第三中学校
大竹　英

「時刻は6時になりました。本日はスタジオに人気ジャーナリストの～」

出勤前に放送されていた朝のニュース番組を見ていたら、随分昔に聞いたことのある名前が聞こえて、思わず目玉焼きを食べる手を止めてしまった。

「うっそ。変わるんだなあ、人って。」

「お姉ちゃん、もうすぐ時間だよー。」

「え？あ、もう行かなきゃ！行ってきます。」

私、小柳夢月は車に乗り込み、ひとり、小さく笑ってしまった。

「これは反則でしょ。」

【第一章　出会い】

受験生は志望校に入学するためにひたすら勉強するだけだと甘く見ていた。やっと志望校が決められたと思ったら、なぜその学校に入学したいのか、その学校を卒業して何になりたいのか、などなど、人生を左右する大きな決断を中学三年生で下さなければならないなんて思ってもみなかった。せっかく決めた志望校も、これから先のことを考えると本当にそれが正解なのかわからなくなってくる。躊躇いなく決断できない私がおかしいのかなあ。そんなことを考えながら今日も進路希望調査の入ったファイルを机の中へ放り込み、考えることから逃げてしまった。

放課後、家に帰っても何だか教科書を開く気になれず、家の近くの公園の大きな木の下に腰を下ろした。幼稚園生の時に友達と喧嘩したのもこの場所で、滑り台の順番待ちでできた行列を堂々と抜かして母におこられて、ひとりで泣いていたのもこの場所。今まで私が成長してきた場所で少し考えたかった。

「私は何になりたいの？」

心からこぼれた声。心の中にとどめておくことはできなかった。二歳の時、始めて食べた洋菓子の味に感動してパティシエになりたいと言っていた私。小学五年生になるまで同じ夢を持ち続けていたっけ。あの頃の方がきちんと夢があって、自分の気持ちに素直な心を持っていたのかもしれない。

「駄目だなあ、私。一体どうしたらいいんだろうね。」

私は全然成長していないのだ。そう思うと恥ずかしさと惨めさで、誰に見られているわけでもないのに顔を隠したくなった。

「あの、会ったことありましたっけ？」

その声は私の背後から聞こえた。木により掛かっていた私は、自分のいる場所の反対側を覗く。高校生くらいかと思われる少年は、太い木の幹越しに背中を合わせて座っていたのだった。

「だから、会ったことありましたっけって聞いてんの。」

「ああ、これは私の独り言で、すみません。」

「ああ、独り言。気味が悪い。」

少年は、読みかけのページに丁寧にしおりを挟んで本を片手に立ち上がり、公園の出口へと歩いて行った。その態度に少々いらだちを覚えていた私は、その声がどこから聞こえてきたのか瞬時に判断することができなかった。

「いいんじゃない、好きな事して、好きなものになれば。」

何の話をしているのかもわからなかった。頭の中でさっきの言葉を反芻する。あの人は、私を元気づけようとしてくれたのだと気づいたのは、それからしばらく時間がたってからだった。意外と単純なのかもしれないと、そんなに悩む必要もないのかもしれないと思った。今私がやりたいこと。それを目指す権利は私にだってあるはずだ。まだまだ悩みは尽きないけれど、この言葉のおかげで少しだけ心が軽くなった。何の事情も知らない彼がかけてくれた言葉だからこそ、私の心に響いたのだった。私は、この心の温かさをそのまま家に持って帰ろうと急ぎ足で公園を去った。

【第二章　光】

　私は舞台袖で自分の順番を待っている。まぶしいほどの光を浴びて演奏する女の子の姿が目に映る。その女の子は私よりも年下のはずなのに、私なんかよりもきらきらしたオーラをまとい、その小さな体からは想像もつかないほどの大きな音で会場を包みこんでいた。

「続いては、小柳夢月さん。」

私は舞台のまぶしさに改めて目を細めながら心を落ち着かせるため、一度深呼吸をした。大丈夫。私は私の奏でたい音を奏でるのみだ。深い礼をして今年で七年の付き合いとなるヴァイオリンを構えた。このコンクールは県内の小学生から中学生を対象としたもので、最優秀賞一名と優秀賞二名が表彰される。最優秀賞に選ばれた人は東北コンクールに進むことができる。私が狙うのは、最優秀賞。これから先もこの楽器と一緒に過ごしていくためには、優勝しなければ。

　速い弓の動きから始まり、だんだんと落ち着いてくる。いいぞ私、その調子。そしてクライマックスへ。最後の力を振り絞って、弾き切った。始まりの時と同様に礼をして舞台袖へと向かった。悔いは無かった。むしろ満足できる演奏だった。

　結果発表。最優秀賞はあの、私の前に演奏をした少女だった。何と小学三年生だそうだ。それを知ってしまうと、自信をもってこのコンクールにやってきた事、最優秀賞を狙っていた自分が恥ずかしくて、消えてしまいたかった。閉会式を終えた帰り際、優秀賞に輝いた二人のうちの一人の男の子が、うちの楽団で一緒に演奏しないかと勧誘されているのを見た。少しこの会場にとどまっていれば自分も声をかけられるかもしれないという考えが一瞬頭をよぎったが、そんなことを考えることしかできない自分に嫌気がさして、逃げるようにして会場を出た。これが悔しいという感情なのか、惨めだという思いなのかはわからなかったが、涙も出ないほどに私の中身は空っぽだった。

　あの日の少年は今日もいるかと気になり、学校帰りにまたこの公園に立ち寄った。私は彼に背中を押されて、家に帰ってから今まで必要だった勇気の半分を使うだけで進路希望調査の空欄を埋めることができたのだった。感じの悪い人だったが、感謝くらい伝えさせてほしい。そう思ってこの間と同じ場所を探すと、あの日と同じように木の下に寄りかかって本を読む姿が見つかった。少しずつ近寄っていくうちに、何と話しかけるかを考えていなかったことに気がつき、悩んでいたのだが見つかってしまった。彼は首をかしげて私の顔をまじまじと見つめる。

「どこかで会ったことありましたっけ?」

口癖かよ、と思ったが、めげずに口を開く。

「あの、三日ほど前に・・・。」

まだ分からないようだ。

「悩み事があって、つい独り言をこぼしてしまったんですけど励ましてもらって、あの、ありがとうございました。」

「・・ああ、あの独り言の人か。」

それで覚えられているのか。御礼を言った私は正しかったのかと自分を疑いたくなる思いをこらえて少し口角を上げる。

「おかげで進路希望調査を期限までに提出できたというか、いつもより楽に書くことができました。」

自分から質問した割に、彼の返事は二文字だけだった。

「そう。」

「それで、あなたの好きな事って何なの。」
二文字で終わりかと思っていたら、予想もしていなかった質問を投げられた。言えばいいのに、声が出なかった。言ってしまったら夢物語だと笑われるかもしれない。もしかしたら、笑い話になんてせず応援してくれるかもしれない。いずれにしても、言ってしまったら叶えなければならない。そういうプレッシャーを改めて感じた瞬間だった。背中を押してもらったばかりなのにまだ勇気が足りないなんて、どれだけ自分は優柔不断なのかと心の中で自分を責める。
「書いたんじゃないの、進路希望調査に。」
「いや、書いたのは志望校で・・」
「めんどくさ。別に、無理矢理言ってほしいなんて思ってない。でも、言ったからって何か変わるわけじゃないし。」
「応援されて苦しくなったり、笑われてくじけそうになったりしないの?」
「情けないな。中三の時に決める夢なんて、この先何が起こってどう変わるのかなんて分からないし、自分の意思で変えていっても良いと思うけど。」
「変わっても、良い?それは諦めるって事?」
「どうしてそういう思考になるかな。諦めるというのは、挫折しそうになったとき仕方ないと捉えて、もういいやって放棄すること。変えるのは諦めるのとは違う。新しい挑戦をして、自分自身を高めていくことだから。」
きっと辞書にもネットにも載っていない説明を聞いて、もう一度考える気になろうと思ったのか、体が勝手に腰を下ろしていた。
「ーヴァイオリニスト。」
「私、ヴァイオリニストになりたいんだ。」
誰にも言ったことがなかったのに。言ってしまえばすっきりするのかと思っていたが、なぜだか少し胸が痛かった。
「そう。」
「二年前に県のコンクールに出場したんだけど、入賞すらできなかった。それでも諦め切れてない自分がいて。いろいろ考えていたらどうすればいいのか分からなくなった。」
「そう。」
「大きすぎる夢でしょ。これ聞いたら、笑いたくもなるでしょ。」
五秒ほど間が空いて、
「俺は君の演奏の実力なんて知らないし、そのコンクールに出ていた人の実力だって知らない。だから、良いんじゃない。あ、別に応援しようとしてるわけじゃないから。」
私は小刻みにうなずいた。それは相づちでもあり、今までの当たり前を覆してくれた彼への感謝の気持ちの表れでもあった。私は本を眺める彼の顔をしっかりと見て言った。
「ありがとう。」
「ていうか、ほんと情けないな。君には応援してくれる人がいるのに弱音ばっか吐いて。幸せなことなんだよ。夢がどうこうと語ったって何にも変わらない人もいるのにさ。」
そう言う彼は、本を見ているようでどこか遠くを見つめているような、寂しそうな目をしていた。
「じゃあ。」
そう言って彼は出口へ向かった。『ありがとう』ともう一度心の中で言葉を贈った。もうそろそろ前に進まなければならない。弱い自分を変えよう。私の心は自信で満ちあふれていた。ただ、一つ気になるのは、あの悲しそうな彼の目だった。人を励ませる人にも、大きな悩みがあるのかもしれないと思った。私はその日、彼の名前を聞いていなかったことを思い出した。

【第三章　勇気と言う気】

「一学期お疲れ様!やっと夏休みだよ。ねえ、読書感想文にぴったりの本教えて。」

「いいよ。じゃあ塾で。」
「了解。あらすじ読んですぐ返すから！」
クラスメイトの陽香は夏休みを前にしてわくわくしているようだ。私は、受験生として過ごす夏休みをいかに充実させるかということを考えている。陽香にはまじめだと言われるけれど、そういう彼女だって塾の夏期講習に参加するし、毎日自習室で熱心に勉強している。クラスのみんなだって、自分は全く勉強していないとか言いながらすごく頑張っているのだと思う。私も頑張らなければ。本当はあの彼の悩み事を聞いてあげたいと思っている。でも私が木の下で人の悩みを聞いている間、難しい問題と向き合っている人もいるのだと思うと少しこわくて出かけられなかった。それに、彼の抱えている悩みは数学の問題よりもずっと難しいのではないか。ついこの間までうじうじしていた私に聞くことができるのか。
「はあ～。一日二四時間じゃ足りないよ。」
机に突っ伏して神様に文句を言ったタイミングで、一階からご飯の支度ができたと私を呼ぶ母の声がした。父と妹の帰りはまだだった。
「なんだか今日は静かね。」
母が言った。
「ねえお母さん。私、買ってもらったヴァイオリン、無駄にしたくない。」
「何、急に。まあ、それは、無駄にしないでほしいけど。お父さんと奮発して買ったものだから。」
「そうだよね。」
「あ、でも、別にプロになれとは言ってないよ。お母さんは、プロとして楽器を弾かなくたってお金が無駄になったとは思わない。楽器を買ってから夢月が努力してた時間を知ってるんだから。」
「まあ、結果は全然駄目だったけどね。」
「いいじゃない別に。なんなら夢月の努力だけでお母さんは十分かな。」
二人そろって手を合わせ、いただきますと言った。
「でももし、プロになりたいって思うんだったら応援するから。」
私はオムライスを口に運びながら言った。
「おいしい。」
ありがとうなんて、この曖昧な気持ちのまま言っていいのかちょっと分からなかった。
　夏休み初日。一日は夏期講習から始まった。
自転車にまたがり、風を切って進む。今年の夏は暑いが、風は気持ちがいい。塾に着くと陽香が先に席に着いていた。
「おはよう。」
「おはよう。あ、本持ってきたよ。」
「ありがとう！これどんな話？」
「友情と未来の物語。ちゃんと読んで書くんだよ。」
「そういえば、夢月は何書くの？」
「私は小説に挑戦しようかと思って。書けるか分からないし、つまらないだろうけど。」
「小説！？何について書くの？」
「それが、まだ考え中。」
何について書こうかずっと考えているのだが、なかなか決まらない。
「そっか。頑張ってね。」
陽香が優しい言葉を掛けてくれたところに、先生が入ってきた。同じ教室にいる男子生徒の号令を聞きながら、今日は公園に行こうと考えた。
　思った通り、彼はいつもと同じ場所にいた。毎日いるのかな。そんな疑問を持ちながら近づく。
「こんにちは。」
「どうも。」
彼は本から顔を上げることなく言った。私も木ごしに背を合わせるような形で座った。
「あの、夏休みの宿題、何やるんですか？」
「は？」
「あぁ、そっか。今更ですけど、学年とお名前を教えていただけますか？」

「中三。星野風雄。」
「かざお。え、中三！てっきり高校生かと。」
私は今まで同じ中学三年生に相談に乗ってもらっていたなんて。
「私は小柳夢月です。ところで、風雄さん、いつも何の本を読んでいるんです？ファンタジー？それともミステリー？」
「どっちでもない。」
風雄は機嫌が悪そうに言った。
「すみません。せめて風雄さんがおもしろいと思うジャンルだけでも、教えてください。」
「俺が読んでるのはエッセイ。だからあなたが知りたいジャンルとは関係なし。」
「へえ、エッセイか。なんていうエッセイ？」
「ジャンルだけでもって言ったでしょ。」
私が本をのぞき込もうとすると風雄は必死に私から本を離した。
「私夏休みの宿題で小説書くことに決めたんだけど、実は題材が決まってなくて。」
「小説家になるわけでもないんだしいいじゃん何書いたって。」
その『何か』が難しいのに、と木に体を預けた。
「でも、エッセイ読んでるとたまに思うんだ。偏ってるなって。人それぞれ環境が違うんだからさあ。」
「エッセイ読むのやめた方がいいと思う。」
つい真剣に言ってしまった。が、反応は思っていたものと違っていた。
「確かに。」
風雄はそう言ってかすかに微笑んだのだった。
「君は自分の思ってることや悩み事でも書いてみたらいいんじゃない。じゃあ。」
そう言って風雄は、今日も早々と公園を出て行った。今日は名前を知れたという大きな収穫があった。しかし、あの悲しそうな目。エッセイを読んでいて、環境がどうとか言っていた。風雄の謎は深まるばかりだった。

次の日も、塾が終わった後に公園に立ち寄った。
『ほんとに毎日いるのかな。』
自転車をおいてから黙って木の下に腰を下ろす。今日こそは言うと決めてきた。
「小説は将来のこと書くことにした。次は風雄の悩み聞くよ。あるんでしょ、悩み。」
「は？悩みってそうやって人から強制的に聞き出すもんじゃ無いと思うんだけど。ていうか、別に無いし。」
「あっそ。私、明日三者面談なんだけど、しっかり今の意思を伝えようと思ってる。それに、今年の冬のコンクールに出場しようと思ってる。とにかく挑戦することにしたから。」
「じゃあ。」
一度は私から言ってみたかったので、今日は台詞を乗っ取ってやった。出口へ向かおうとしたら、「旅館」と言う声が聞こえて振り向いた。そこには立ち上がった風雄がいた。しおりを挟まずに草の上に置いたまま本を閉じて手に持っている。
「俺の家、旅館なんだ。俺はそこの長男だから、継がなきゃならない。この夏休みの間はここの近くにある店舗の手伝いで来てるけど、夏休みが終わったらまた本店に帰る。」
私は、出会って二回目にこの場所で風雄が言っていたことを思いだしていた。
『夢がどうとか語ってもどうにもならない人もいるのに』
この言葉の裏に風雄の悩みが隠れていたとは。やっと自分に心を開いてくれた嬉しさよりも、今まで自分がどんなに風雄を傷つけていたかという事を考えて心から申し訳なく思った。
「ごめん。これまで私が言ってきた事、嫌だったよね。風雄の方がずっと悩んでるのに。」
「やめてよ、俺が不幸みたいな言い方。それに、悩みに大きさなんてない。

君のだって十分悩みだった。」
「本当は家業を継ぐこと以外にやりたいことがあるの？」
「いいんだ。俺はこれでいい。」
「諦めるんだ。」
「諦めるんじゃない。」
「諦めてるよ！これでいいじゃなくてこれがいいじゃないと。」
黙って私の話を聞く風雄に無性に腹が立ち、自転車にまたがっていつもの三倍の速さで家に帰った。
　翌日、三者面談の日がやってきた。母と私は学校までの道を自転車で下った。教室はひんやりしていてなんだか緊張する。母と私は先生と対面になるよう隣に座った。面談は着々と進み、ついに進路の話題がやってきた。
「お母様は娘さんの進路についてどのようにお考えですか。」
母が答える。
「本人が行きたいところに行ってほしいという考えです。」
「夢月さんはどうしてこの学校に行きたいの？」
「それは、ヴァイオリニストに、なるためです。」
大人達のきょとんとした顔を前に、私は間違いを訂正する。
「あ、あの、ヴァイオリンを極めるためにという意味ではなく、自分の夢を追いかけるために行くという意味です。これから先私の夢は変わっていくかも知れません。もちろん今のまま、変わらないかも知れません。今の私に、将来夢が変わるか変わらないか、叶えられるか叶えられないのかは分からなくて。だからなるべく、将来自分が困らない学校に行きたいんです。行かせてください！」
私はなぜか頭を下げる。
「お母様も今聞いたんですね。」
「はい。でも驚いていません。思い出しました。小学生の時夢月が、ヴァイオリンを習ってみないかと誘われたんです。その時、卒業しても続けたいという気持ちだけで家に帰ってきてすぐにやりたいと言っていました。今しか志せないことを見つけられたようで良かったです。」
「私はびっくりです。夢月さんがこんなに熱くなっているところを初めて見たもので。じゃあ、合格に向けて頑張ろうな。」
「はい！」
帰りは行きとは逆で上り坂だったので、自転車をゆっくり押しながら帰った。今だったら言える。
「ありがとう。」
「何がよ。」
母は笑いながら言った。

【第四章　私たちの未来は】

　その日も風雄はそこにいた。近づいていくと、こちらに気がついたようで本から一瞬目線を私に向けたが、またすぐに本へと落としてしまった。私も木の下にいつものように腰を下ろす。目をつぶって温かい日差しを感じていたらまぶたの裏が暗くなった。目を開けると、上から私を見下ろす風雄だった。風雄はゆっくりと本のカバーを外した。
『夢を叶えたい君へ』
「諦めたくない。でも、諦めなくちゃいけない時ってあるのかもしれない。」
風雄は、まだ揺れる心を抱えて一生懸命自分に向き合おうとしている。風雄は本をもつ手を私に伸ばしてきた。それを受け取って題名をもう一度丁寧に読んでいく。「君」まで来て後一文字というところで、本がゆがんで手から落ちそうになり、慌てて風雄に返す。
「なんでおまえが泣くんだよ。」
「風雄、よく頑張ってるね。偉いよ。偉い。」
「どの立場だよ。」
笑いながらそう言う風雄は、嬉しそうだった。そしてもう一度私の後ろに座りなおす。
「三者面談どうだったんだよ。」

「言いたいこと言えて良かったよ。やっぱりさ、応援してくれる人がいるって良いことだなって思った。」
「そう。」
「でも、風雄のお母さんもすごいね。いろんな所飛び回ってるんでしょ。」
「けど、仕事に誇り持ってるんだろうし。」
「かっこいいな。そんなお母さんに応援してもらえたら、風雄、めっちゃ幸せだね。」
私たちはしばらく無言で座っていた。
「そろそろお昼だし、帰ろうかな。」
私は立ち上がって伸びをして
「じゃあ。」
と言った。
「あ、俺そろそろ地元に帰ると思う。まあ地元って言っても県内なんだけどね。」
「そっか。じゃあ、お元気で、旅館の長男さん。」
意地悪く笑って見せると、風雄が言った。
「俺達、将来何になっても笑わない約束な。」
「どうやって風雄が何になったか知るのよ。」
「知るかもしんないだろ」
「いいよ、分かった。」
名前も知らなかった私たちは同じ悩みを抱えて生きていた。きっとこれから先もそれぞれが悩んで生きていくだろう。でもそんなとき、相談に乗ってくれる彼はもういない。そう思うと自然に、ハンドルを握る手に力が入った。これは恐怖じゃない。覚悟だ。
　夏期講習も残すところあと三日だった。風雄と最後に別れてからはもう一週間が経とうとしていた。いつもは先に到着している陽香がその日は授業開始三分前に教室に滑り込むように入ってきた。
「セーフ！」
「おはよう、陽香。」
「おはよう夢月。親子げんかの一部始終見てたら遅れちゃった。」
「親子げんか？」
「そうそう。あの、夢月の家の近くにある公園でさ、男の子が母親と言い合ってて、頭下げて応援してほしいとか言ってんの。」
もしかして。
「ごめん陽香、私忘れ物思い出しちゃって、どうしても必要だから取りに行ってくる。」
「え！」
塾の階段を降りて塾を飛び出した。自転車をいつもの五倍の速さでこいだ。公園に着くと、いつもの場所に風雄はいなかった。少し奥まで行ってみると、母親らしき女性の後を距離をおいてついて行く風雄の後ろ姿が見つかった。私が立っている場所からは遠い。でも、届いてほしい。私は大声で叫んだ。
「がんばれよーー！」
神様どうか、私の大切な友達が、大切な人に応援してもらえますように。どうか、がんばっている世界中の人が幸せになれますように。

【by 風雄】
いつものように本を読んでいた。
「何をしてるのよ、こんなところで。帰る支度は整っているの？」
「母さん。」
「終わってるよ。でも、一つ話したいことがある。」
「何？」
「俺はずっと旅館を継ぐことが義務だと思っていた。でも本当は、違う夢があるんだ。その夢を叶えるために中三の残りの時間を使いたい。」
「と、思ってたんだけど、仕事に誇りを持ってる母さんを見てきたから夢を見つけることができたんだって気づいて。だから、旅館も継ぎたいし自分の夢も追いかけたい。欲張りだって事も、そんなに世の中甘くないって事も知っているつもりなんだ。だけど、母さんにだけでも応援し

てほしい。お願します。」
頭を下げた俺に母さんは優しく言った。
「話を聞こうともしないで、今までごめんね。すごいじゃない、夢。応援する。」
うちの母さんは気持ちを素直に言葉にするのが得意ではないのかもしれない。さっさと歩いて行ってしまった。すると後ろから叫び声が聞こえてきた。
「がんばれよーー！」
間違いなくそれはあいつの声だった。
「びっくりした。何？知ってる方？」
母が驚いた顔で尋ねてきた。
「ううん。誰か他の人に言ったんじゃないの。」
俺も母と一緒で、気持ちを素直に言葉にするのが苦手だ。自分の弱みを見せるのも苦手。大声で言うなよ。—俺は心から彼女に感謝している。

【第五章　時代と共に】

「うっそ。」
朝のニュース番組に出てきたジャーナリストは、星野風雄だった。車の中ではいつもラジオを聞くが、今日はテレビをつける。
「星野さんはどう思われますか。」
「そうですね。私は、この報道を信じていません。だって真実は本人にしか分からないものですから。自分の考えを持つことは大事だと思いますが、それを他人に強要してはいけないと思います。」
「ついつい共感を求めてしまうことはありますよね。難しいですね。」
「はい、難しいです。ですが、他人と違ったからといって自信をなくすのは違う気がするんですね。自信をなくしてしまい、多くの共感者がいることを確かめるために報道するのは良いことではありません。この事件の場合も、容疑者と呼ばれる人の考えを支持する人がいるかも知れないし、被害者と呼ばれる人の考えを支持する人もいると思います。大事なのは、見えない応援の力を信じることですね。」
そう言ってきらきらした笑顔を見せた。あの頃の無愛想とは全くの別人だ。
「かたよってるな。」
私はその輝くスマイルと、エッセイを読んで文句を言っていた風雄を思い出して笑った。私は、あの日の約束を破ってしまった。
元気な小学生達の挨拶を聞きながら職員室に入る。
「朝のあいさつ、起立—」
朝の学活では、担任が毎日一言話すことになっている。今日話す内容は、もう決めていた。
「突然だけどみんな、将来の夢はありますか。先生はみんなと同じ年の頃、パティシエになりたいと思っていました。でも今はこうして先生をやっています。みんなの中に、何になろうかなと迷っている人もいると思います。まだ分からないなって言う人もたくさんいると思います。でも、これだけはみんなに覚えておいてほしい。絶対に諦めないこと。まだ難しいかもしれないけど、困ったときはぜひ思いだしてください。」
風雄はあれからどんな人生を歩んだのだろうか。人は変わっていく。でもそれは決して悪いことではなく、成長するための過程なのだと今は思える。
「ねえ、先生。私、将来は先生みたいな先生になりたい。」
今掛けるべき言葉はきっと
「先生、応援するね。」

（指導教諭／加　藤　千　尋）

《作品の意図》

これは、中学三年生の小柳夢月（ゆづき）と星野風雄（かざお）が出会い、互いの悩みを不器用ながら解決していく物語です。受験生になって初めて直面する進路の悩み。そして、将来の悩み。きっとそれらの悩みは一生尽きないと思うけれど、少しずつ前に進んでいくことが大切なのだということ、そして、

未来への希望をこの作品に込めました。また、この作品には自分の体験も織り交ぜました。この小説を書くということを通して、自分自身も少しだけ成長できた気がしています。
最後まで読んでいただけると幸いです。

《作品の寸評》

自分は将来、何を職業としてどう生きていくのか。この悩みをもつ主人公が、一人の少年との出会いによって、本当に自分が目指したいことに気づき挑戦していく成長の物語である。読後感が清々しい。

主人公は、初め自分の進路決定にこれが正解かと逡巡する。進路は一度決めたらそれに向かって邁進するべきという融通のきかないところもある。しかし少年の言葉から、心の隅にある本当にやりたいことに気づき、周囲に「今の意思を伝えよう」「とにかく挑戦する」と決心し、歩み始める。主人公を励ました少年もまた家業とやりたいことの間で揺れ動く。

主人公の思い悩む姿の描写が巧みで引き込まれる。少年の言葉も効果的で読者の胸に響く。中学生が経験する悩みをモチーフにした優れた作品である。

（審査員／三　輪　晶　子）